

報告・資料

「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」に関する活動報告(第2報)
— 紙芝居「きせきの子牛」の制作と上演活動について —

A Report on the Study Group for Local Area Design by means of The Amazing Calf ‘Genky’ (I)
— The Production and Presentation Activities of *Kamisibai ‘The Amazing Calf’* —

松岡信義

1. はじめに

第1報では「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」(通称「元気くんの会」)の発足までの経緯と、発足後1年間の活動成果の概要が報告された。既報のように、この「元気くんの会」には4つのプロジェクト部門がおかれており、そのうちの1つに「紙芝居」実行委員会がある。紙芝居の上演や紙芝居の貸し出し等の活動は、現在、美作女子大学とおかやまファーマーズ・マーケット(以後、OFMと略記)・ノースヴィレッジの2カ所を拠点に行なわれているが、子牛をテーマとした紙芝居の制作とその活用の取り組みは、これまでの「元気くんの会」の活動を牽引し、会の活動全体を励まし推進する役割を果たしてきた。

本報では、津山市から吉井川の濁流にさらわれ、瀬戸内海の小島に漂着して生還した「きせきの子牛」の実話が紙芝居に再現される経緯と、制作された紙芝居を活用した取り組みの詳細を、美作女子大学を拠点とする活動に焦点づけて報告する。¹⁾

2. 紙芝居の制作

(1) 契機

第1報で述べられているように、「元気くんの会」が発足するきっかけとなったのは、OFM活性化検討委員会の会期中におこった「きせきの子牛」の生還劇とこの子牛のOFMノースヴィレッジへの寄贈であった。具体的には、「心の栄養としてより多くの子ども

達に子牛の実話を語り伝えること、そして、半世紀に一度という大災害を記録に留めておくことを目的として²⁾、OFM活性化検討委員会(第3回会議:平成10年11月30日)において子牛の絵本化事業の提案がなされたことによる。

しかし、絵本化への発議はあったものの、この提案が実行に移されるための課題を解決し、付随する条件を整備して行くためには応分の時間を必要とした。このとき、子牛の寄贈がマスコミ等によって報じられたことで来園者が目立って増加してきていた折り、実際の子牛を目の前にした来園者に「きせきの子牛」の実話をイメージ豊かに伝えるには紙芝居も1つの有効な方法ではないか、という提案がなされた(提案者:石堂寿隆ノースヴィレッジ支配人)。そこには、紙芝居の制作であれば、資金的課題の側面からも、また制作に要する時間的側面からも、絵本化事業に比すればはるかに取り組みやすいだろう、という思いもあった。そこで、絵本化のために必要な作業を進めることと並行して、紙芝居の制作に着手することとなったのである。

(2) 制作

①制作要領

OFMノースヴィレッジから美作女子大学へ紙芝居の制作依頼がなされたのは、平成10年12月中旬のことである。子牛がノースヴィレッジへ寄贈されたのが11月18日であるから、子牛の寄贈から1カ月を俟たずし

て、紙芝居制作の現実の活動の一步が踏み出された訳である。

別掲する「ノースヴィレッジ『奇跡の子牛』紙芝居制作要領（素案）」³⁾はその間に（より正確には、子牛の絵本化事業の提案があった11月30日以降の半月ほどの間に）起案されたものであるが、この素案の段階で未定であった紙芝居の制作依頼先が美作女子大学となったことには、次の二つの事情が大きく作用している。一つには、O F M活性化検討委員会には美作女子大学から目瀬守男（学長）、福田恵子（助教授）の両氏が委員として参画しており、発端となった絵本化事業の提案が福田氏によるものであったことである。

二つ目は、この「制作要領（素案）」に記載されている事項からも示唆され得る「制作の担い手」のイメージに関わるものである。「制作要領」（素案）には、紙芝居の内容として、特に次の事項に留意されるべきことが示されていた。

- ①対象は小学校低学年程度とする
- ②「奇跡の子牛」の強い生命力があふれていること
- ③子供たちに勇気と感動を与えること
- ④幸福な結末になっていること

紙芝居の内容に対するこれらの留意点は、子牛の実話が伝えようとするメッセージとそのメッセージの中心的受け手を念頭において示されたものである。津山市から吉井川の濁流を瀬戸内海の小島まで90kmも押し流されながら、幾多の困難をくぐり抜けて生還した生後6カ月の子牛は、災害の復興に取り組む人々への大きな励みとなったばかりでなく、マスコミ等によって広く伝えられたことにより、一躍、「命の尊さを改めて人々に問いかける存在、“生きる喜び”“勇気”“努力”“希望”のシンボリック的存在」⁴⁾となっていた。紙芝居の内容に対する留意点はここから発しており、この子牛の実話を紙芝居にするにあたっての制作の担い手は、紙芝居の中心的受け手である子どもたちに共感し得る、自らも瑞々しい感覚をもった人たちであることが願われた。発端となった子牛の絵本化事業を提

案した福田氏の勤務する職場が教員養成の課程をもつ女子大学であったことから、学生たちが働きかけに応じることを期して、美作女子大学に制作依頼がなされたのである。

②取材旅行

制作に向けての取材旅行は、下見取材を含め、3回に及んだ。

下見取材（平成10年12月28日：石岡牧場～前島）は教職員2名で行なった。この時は、石岡牧場から吉井川沿いに県道26号線を南下して子牛の流されたルートの様子を調べ、牛窓町の前島から子牛が漂着した黄鳥を間近に観察した。

第1回取材旅行（平成11年1月24日：石岡牧場およびノースヴィレッジ）は学生6名と教職員2名、それにノースヴィレッジ職員3名とで行なった。石岡牧場の石岡基社長から洪水当時の詳しい状況を聴くことができた上、牛たちが目の前で濁流にさらわれる瞬間をとらえた未公開の貴重なフィルムが存在するを知った。

第2回取材旅行（平成11年3月6日：石岡牧場～黄鳥）には、学生4名・教員2名・ノースヴィレッジ職員2名の他、県農政企画課参事（千葉茂）・獣医師（亀森泰之）・NHK記者（大柏良）が加わり、総勢11名の取材陣となった。この時の取材では、新田原井堰（和気町）・坂根合同堰（瀬戸町）・鴨越堰（岡山市西大寺）という吉井川の三つの大きな堰や多くの橋の構造などを調べた他、鴨越堰から黄鳥までの海上を、子牛が流されたと思われるルートを辿り、潮流や養殖ノリの網の配置など、さらに子牛が漂着した岩礁や子牛を救助の船に乗せた浜などをつぶさに調査した。

③ストーリー（シナリオ）および絵の制作

紙芝居のストーリー（シナリオ）と絵の制作は、第1回取材旅行の前後から始められた。大学の学生ホールを恒常的な作業の場とし、平日の放課後を中心としつつも、土・日や春休みの相当部分を当てて取り組むことになった。紙芝居であるからには「芝居」の部分、すなわちシナリオとしての体裁が求められるが、私たちはシナリオに脚色する以前のストーリーそのもののか

ら作り出さなければならなかった。

第1回取材旅行の直後にNHKの取材を受け、これは数日後に番組「きびきびワイド」で放映されたが、この時点では、ストーリー（シナリオ）も絵も未だ多くのラフスケッチの段階であった。制作当事者の側に身を置く者として痛感したのは、台風による一級河川の氾濫という自然の猛威と、その自然の猛威をくぐって生き抜いた子牛の命の軌跡（奇跡）が描かれ切っていない、ということであった。台風当夜の激流を想像しながら吉井川に沿って下り、海上に出て、子牛が漂着した瀬戸内海の黄島まで取材した子牛の「命の旅」を辿る第2回取材旅行は、この点を克服するうえで決定的に重要な意味をもつことになったと思われる。

当初はストーリー（シナリオ）の作成と絵の制作を並行して手がけていたが、第2回取材旅行を経るなかで、まず伝えたいメッセージを確かなものにしなければならない、ということに意見の一致を見、学生と教員（福田・松岡）が対等の立場で共同してストーリー（シナリオ）の作成に取り組むことになった。作成過程で伝えていただいた近在の小学校教員の感想なども得つつ、3月9日には丸一日をかけてストーリー（シナリオ）についての集中的検討も行なった。このような経緯で作成されたストーリー（シナリオ）であるが、この間、このストーリー（シナリオ）を書き改める作業はほぼ10回に及ぶことになった。

絵の制作は、手がけ初めから完成まですべて学生たちの共同と分担によるものであるが、ストーリーからイメージされる絵柄について黒瀬智子氏（小学校教員）からいただいたコメントは、作品としての紙芝居における「絵」と「ストーリー」の関係を改めて強く意識させることになり、構想を定める上で貴重なものであった。このような助言や示唆を得て、最初はアニメ風であった絵柄も、先に述べた「自然の猛威」と「命の軌跡（奇跡）」が緊迫感をもって描かれるようにしようということで、下絵を4、5回かきなおし、写実的なものにしていった。デッサンやかきなおしの過程で中島ゆみ氏（美作女子大学児童学科卒業生）から受けた懇切な指導は、得がたいものとして、特に記しておく

ねばならないものである。こうして、子牛の表情や濁流の勢いなど迫力のある絵ができあがり、表紙を含む16枚の絵はポスターカラーで着色した。

3. 完成と上演披露

4月29日、絵ができあがる。5月1日に絵の裏打ち（厚紙貼り合わせ）作業を行ない、4日にシナリオの貼り付けなどの最終仕上げを行なって、ここに紙芝居「きせきの子牛」が完成した。この間、完成間近の数日間に山陽新聞やRSKの取材を受け、記事として掲載され（5月2日）⁵⁾、番組「山陽イブニングニュース」で放映された（5月3日）。

5月5日（こどもの日）、ノースヴィレッジにて紙芝居「きせきの子牛」の披露・公開が、入園者・行楽客を前にして、学生の上演というかたちで行なわれた。また、紙芝居の上演に先立ち、津山少年少女合唱団によって「子牛の元気君」（中林淳真作詞・作曲）が合唱披露され、これらの様子はNHKやRSKなどによって放映され、山陽新聞や毎日新聞等によって報道された。

4. 研究会のプロジェクトとして

既報のように、「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」（以後、研究会と略記）には4つのプロジェクトがおかれたが、そのうちの1つが「紙芝居」実行委員会である。この「紙芝居」実行委員会は“青少年の健全育成を図り、地域の活性化に寄与する”という研究会の目的を紙芝居「きせきの子牛」の活用によって実現していこうというものである。

研究会の発足会議（平成11年10月18日）において提案され（提案者：松岡）、了承された「紙芝居『きせきの子牛』の活用について」と題するこのプロジェクトの目的は次の通りである。

平成10年10月の台風10号によって吉井川の濁流に投げ出され、瀬戸内海の小島に漂着して奇跡的な生還をとげた子牛は、その生命力の強さと生きぬくことへのひたむきさによって大きな感動をよび、災害からの復興に取り組む人々に励みを与え

た。紙芝居「きせきの子牛」は、この事実をより多くの人々に、とりわけ健やかな成長が願われる子どもたちに伝え、自然の猛威と命の尊さについて考え話し合われることを願って制作された。この紙芝居「きせきの子牛」を多面的に活用することで、「元気くんの会」の目的実現に資するのが、このプロジェクトの目的である。

そして、紙芝居「きせきの子牛」の活用の態様として、次の4点が提案され、了承された。

- ①紙芝居コンクールに応募する。
- ②この紙芝居を全国の子どもたちに観てもらえるよう、紙芝居として出版する方途を探る。
- ③この紙芝居を上演したのは、未だ全く限られた機会においてのみである。市民等の要望に応え、また要望を掘り起こすために、今後、上演の機会を広げていく方途を探り、そのための態勢を整える。
- ④紙芝居「きせきの子牛」が発信するメッセージは普遍的であると考え。外国語に訳し、世界の子どもたちにこのメッセージを伝えたい。そのための方途を探り、手近なところから実践する。

この4点にわたる「活用の態様」は、研究会の発足時点での当面の企図であって、コンクールへの応募については進行中（後述）であったものの、②③④については、それぞれの項で用いられた「方途を探る」という表現に象徴されるように、具体化はすべてこれから、というものであった。言わば、研究会の発足に添わせて立ち上げたプロジェクトという側面も少なくなかったのである。しかし、「当面の企図」を実現すべく「方途を探って」いく過程で、一つひとつの活動が実績となって次の活動を励ますものとなり、研究会全体の意識の高揚を生み出していくことになった。

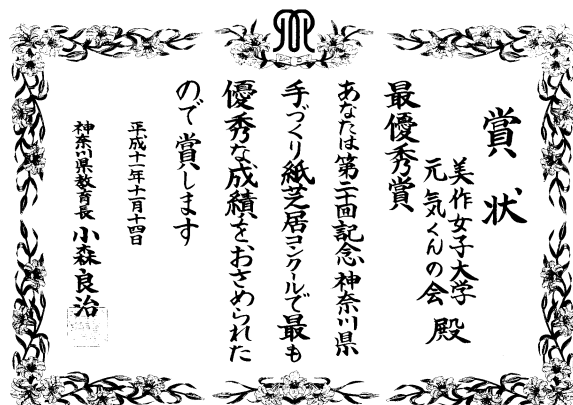
5. 紙芝居コンクールへの応募と受賞

紙芝居コンクールへの応募は、この紙芝居「きせきの子牛」の出版の方途を探る過程で行き合ったものである。

7月下旬、松岡の提案と働きかけで紙芝居の出版の可能性を探る中、神奈川県在住の児童文学作家・丘修三氏の協力を得て、丘氏に紙芝居の制作・出版を行っている（株）童心社および（株）教育画劇との仲介の労をとっていただいた。その折り、丘氏からの情報によって、この2社がともに協賛している「第20回記念神奈川県手づくり紙芝居コンクール」⁶⁾が作品を募集集中であることを知り、丘氏からこれに応募するよう勧めをうけた。学生の夏季休業中のことであったが、学生と教員（松岡・福田）が連絡を取り合って協議の上、募集要領で求められる条件の整備や応募に向けた必要な作業を行なって、このコンクールに応募したのである。コンクールで受賞することになれば出版への大きな足がかりを得ることになるだろう、という思いが大きかったからである。

10月13日、予備審査の結果、全国からの応募総数245点（ジュニアの部：172点、一般の部：73点）の中から「きせきの子牛」は一般の部入選作品9点のうちの一つとなり、11月14日に横浜で行なわれる本審査会に臨むことになった。

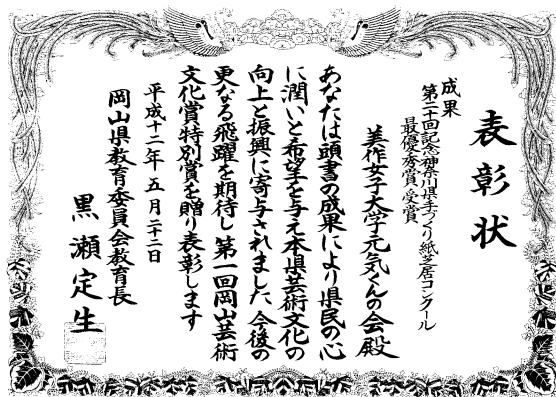
11月14日、本審査会が横浜市栄区の「地球市民かながわプラザ」で行なわれた。この本審査では、予備審査通過作品を応募者が演じ、内容、演出方法などが総合的に審査されるというものであった。大学の配慮を得て、共同制作者である学生8名と制作指導にあたった教員2名が研修と引率を兼ねて出席したこの本審査で、「きせきの子牛」は最優秀賞を受賞した。





1999. 11. 14 (日) 横浜：地球市民かながわプラザにて
丘修三氏(右端)、野平匡邦氏(中)、寺内侃一氏・石堂寿隆氏(左端)

本選へと選び抜かれた作品だけに、出来栄も実演も、見応え聴き応えするものばかりの作品群のなかで、「ノンフィクションが訴える力」と「絵の迫力」、それにパートを分け持って演じ切った学生たちの「話術」がこの最高の賞を射止めることになった。OFM前理事長の野平匡邦氏をはじめ、今回のコンクールへの応募のきっかけをつくっていただいた丘修三氏、さらに日本アニメーション(株)演出家の楠葉宏三氏らも応援に駆けつけてくださり、喜びを分かち合った。この受賞は紙芝居の出版・絵本制作・アニメ化といった各プロジェクトの活動に大きな励みをもたらすことになった。なお、この受賞が成果とされて第1回岡山芸術文化賞特別賞を受賞(平成12年5月22日)したことも特に記しておかねばならない。



2000. 5. 22 (月) 岡山芸術文化賞表彰式
前列右から黒瀬教育長、石井知事、福田の各氏

6. 出版に向けての取り組みから

丘修三氏の仲介をいただいて「第20回記念神奈川県手づくり紙芝居コンクール」の協賛団体であった(株)童心社と(株)教育画劇に、「きせきの子牛」が紙芝居として出版できるよう働きかけを行なった。このうち教育画劇の方は丘氏による打診の段階で出版を引き受ける可能性がないことを知り、以後は童心社に的を絞っての働きかけとなった。

童心社出版部と連絡をとりだした初期の段階(平成11年11月下旬～平成12年2月上旬)では、出版の見通しは明るいものと言ってよかった。出版部に送付した紙芝居のカラーコピー複製版と制作に関わる資料を手にした担当者から、「迫力のある作品である」と言われ、根拠として「絵に力がある」ことと「ノンフィクションという強み」を挙げられたからである。そして、出版することになれば、「話の展開にひとひねり入れる」「脚本が長いので整理が必要」といった部分的な改良は要求することになるだろうが、定期的企画会議(6月中～下旬)に正式に提案する、と言われたからである。これが2月1日の時点での状況であった。その後、5月24日には、紙芝居の貸し出しや学生による上演などの活動、さらに、英語版作成と海外での上演(後述)、第1回岡山芸術文化賞特別賞受賞といった、その間の私たちの活動についての報告とともに活動を紹介する資料を送付するなど、前途に期待を繋げつつ童心社の

企画会議での検討の行方を見守ってきた。しかし、結果は芳しいものとはならなかった。

7月7日、こちらからの働きかけに当初から一貫して対応してくれている童心社側の担当者に向いをたてたところ、答えは次のようであった。即ち、企画会議で、「商業出版として適うものかどうか」という観点から検討を踏まえた結果、「このままでは出版物にはしにくい」ということになった、というのである。つまり、「手づくりの良さ」と「商業的観点」とが今回の場合には両立でき難い、ということになったのである。

問題となったのは絵であるという。つまり、「これだけ迫力のある絵」であるからには「部分的な直し」というような問題ではない」ということであり、もしそうすれば「全体としての想いを壊すことになりかねない」というのが出版見送りの理由となったのである。紙芝居「きせきの子牛」を紙芝居として出版することをめざした取り組みであったが、出版見送りという結果とこの結果に行き着く経緯から、私たちは、作品に込める想いとその想いを込めた作品をより多くの人々に伝える方法との間にある問題について、改めて考えさせられることになった。

7. 英語版作成とオーストラリアでの上演

「紙芝居」実行委員会では、紙芝居「きせきの子牛」を外国語に訳し、世界の子どもたちに「きせきの子牛」のメッセージを伝えようという方針を掲げたが、このことが実現する機会の到来は思いのほか早かった。

美作高校とオーストラリアのエメラルド・セカンダリー・カレッジ（以後、E S Cと略記）との姉妹校交流で、平成11年10月、生徒を引率して美作高校を訪れたE S Cのピーター・ボンド氏教師夫妻を紹介された松岡が、この教師夫妻に紙芝居の現物を見せてエメラルドでの上演の可能性を尋ねたところ、笑顔での快い返事が得られた。このことから、松岡が渡豪して上演する方向が決心されたのである。英語版作成に取り掛かったのはそれからである。翻訳は美作女子大学非常勤講師のマイケル・ヴォレック氏夫妻によるものであり、2月15日の英訳版の完成を経て、松岡は同氏から

上演にあたってのリーディングについて指導を受けた。

平成12年の3月21日から24日にかけて、オーストラリアのヴィクトリア州・エメラルドのメンジー・クリーク小学校（3、4年生・20数名）、アリスベリー高齢者福祉施設（10数名）、E S C（7年生〈中学1年〉・20数名）の3カ所で上演を行なった。小学校では担任の教師たちにも、また、E S Cでは担任のほか副校長と事務長（共に女性）にも観ていただいた。上演後、小学校でもE S Cでも、子どもたちからいくつかの質問も出たことから、かなり興味をもって聴いてくれたように思われる。元気くんの命の旅のメッセージは南半球の子どもたちにも確かに伝わったと思いたい。



なお、英訳版とオーストラリアでの上演を契機としてNHK国際放送局「ラジオ・ジャパン」の取材を受け、5月11日（日本語で）と5月18日（英語で）の2回にわたって、これまでの「元気くん」に関する一連の事実や様々な活動への取り組みが全世界に報道された。

8. サークル「美作女子大学元気くんの会」

平成11年5月5日に紙芝居の初披露を学生の上演というかたちで行なう後、研究会の発足（10月18日）に至る5カ月余の間に、この紙芝居が活用された機会は5月28日と6月5日の上演という、僅か2回のみであった。ところが、研究会が発足し、その活動内容が報知されるに及んで、紙芝居が活用される状況は一変した。

状況の一変をもたらした決定的要因は「第20回記念

神奈川県手づくり紙芝居コンクール」での最優秀賞受賞である。この受賞を境に紙芝居が活用される機会が一挙に増大したからである。コンクールでの受賞が各種のメディアで伝えられたことにより、あらゆるところから上演依頼や紙芝居の借り出し依頼が舞い込むようになったのである。このため、「紙芝居『きせきの子牛』貸出し規程」「紙芝居『きせきの子牛』の貸出し申請書」「紙芝居『きせきの子牛』上演学生の派遣申請書」などの各種書類を作成して、多方面からの要望に対して見通しをもって対応できるように、態勢を整えることになった。

この態勢の整備において特筆すべきは美作女子大学元気くんの会の組織と活動である。「美作女子大学元気くんの会」という名称は、先の紙芝居コンクールの本審査に臨むにあたって、正式な応募団体名として使用したものが定着したものであるが、実際の活動は学生8人が紙芝居の制作に取り掛かった時点から始まっている。特徴的なのは、紙芝居の制作過程やコンクール受賞後の上演活動等において、教員と学生が単に指導―被指導という関係からだけでなく、ともに対等の立場で意見を述べ合い、力を出し合うなかで一つ一つの活動を積み重ねてきたということである。美作女子大学学生会の「平成12年度同好会・研究会」としての承認も、これまでの活動実績と今後の活動方針がこの趣旨に沿っていることを踏まえてのものである。

会の構成メンバーは、紙芝居の制作や上演活動に関わってきた学生のみならず、趣旨に賛同する学生や教

職員から成っている。ちなみに、この美女大元気くんの会の顧問は、「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」（通称「元気くんの会」）の総合事務局長でもある福田恵子氏であり、氏の意識と行動がこの会の活動を推進させ、そのことによって同時に、母体である「元気くんの会」の目的を豊かに実現する上で、特に大きな要素になっていることを指摘しておかなければならないだろう。

9. 今後の課題

紙芝居の制作と上演活動に関わる取り組みを詳細に見てきたが、これまでのところ初発の勢いがさして衰えることなく、一つ一つ成果を積み上げてきたように思われる。紙芝居を活用する取り組みは、今後も美女大元気くんの会を拠点にして上演活動と貸し出しを中心にしつつも、マンネリ化を防ぐために新たな試みについて知恵を出し合い話し合っていくが必要になってくるであろう。言うまでもなく、活動を維持し続けていくにあたって必要なのは長期の見通しである。これまで学生たちもボランティアでの活動としてよく市民の期待に答えてきたし、中心となっていた学生が卒業したあと新たに2年生や1年生が活動に参加してきてはいるが、「美作女子大学元気くんの会」が「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」にしっかりと位置付き、学生も地域を支える確かな一員であるという自覚と自負を持ち得るように意識を高めあっていることが期待される。そして今後は、地域のサークル活動を担っている人々の中からも「元気くん」に関わる活動に参加する者が現れてくるように、働きかけを行なっていくことも重要な取り組みになってくるものと思われる。

註

- 1) 後掲の表1「紙芝居『きせきの子牛』ができるまで」および表2「紙芝居『きせきの子牛』の制作と上演活動に関する記録」を参照。



- 2) 福田恵子『『きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会』に関する活動報告（第1報）－研究会結成までの経緯と活動の概要について－』（本紀要に所収）
p. 98
- 3) これはOFMノースヴィレッジ支配人の石堂寿隆氏によって提示されたものである。（後掲資料1）
- 4) 前掲第1報， p. 94
- 5) 後掲資料2「山陽新聞」（平成11年5月2日付）を参照。
- 6) 神奈川県立図書館と神奈川県視聴覚教育連盟の主催するコンクール（募集期間：平成11年7月1日～平成11年9月16日）で、「視聴覚教育資料の一つとして、手づくりの紙芝居を奨励し、子どもの豊かな感性の育成と生涯学習の支援を図るため」に開催された。応募作品のテーマは自由であるが、手づくり（台本・画ともに自分で考えた創作のもの）に限るという条件が課せられた。神奈川新聞社と地球市民かながわプラザが後援し、（株）童心社・（株）教育画劇・（株）東芝神奈川支社・（株）有隣堂が協賛した。

（2000年12月1日 受理）

表1 紙芝居「させきの子牛」ができるまで

日 時	活 動 の 内 容 ・ 事 項 等	備 考
平成10年 12月中旬	<p>・ノースヴィレッジより、美作女子大学へ紙芝居の制作依頼がなされる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>掲示板にて制作に参加する学生を公募したところ、次の8名がこれに答える。(全員が演劇部に所属)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>吉川晶子 (児童学科4年) 森松 奏 (") 近本陽子 (食物学科2年) 藤山奈津紀 (") 井上 綾 (児童学科2年) 垣花実智栄 (") 末長美希 (") 丹下つかさ (")</p> </div>	
12月28日	<p>・牛窓町の前島まで下見取材を行なう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>教職員2名(福田・片山)</p> </div>	
平成11年 1月24日	<p>・第1回取材旅行を行なう。(石岡牧場およびノースヴィレッジ)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>教職員2名(福田・片山) 学生6名(森松・井上・垣花・末長・近本・藤山) ノースヴィレッジ職員3名(石堂・水島・清水)</p> </div>	
2月25日 3月1日 3月6日	<p>・NHKの取材を受ける。 ・NHK番組「きびきびワイド」で放映される。 ・第2回取材旅行を行なう。(吉井川～黄島)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>教員2名(福田・松岡) 学生4名(吉川・垣花・末長・近本) ノースヴィレッジ職員2名(石堂・水島) 県農政企画課参事(千葉) 獣医師(亀森) NHK記者(大柏)</p> </div>	同日夕再放送・3/4再々放送
3月9日 3月13~17日 4月22日 4月24日 4月26日 4月29日 5月1日 5月2日 5月3日 5月4日 5月5日	<p>・紙芝居のストーリー(シナリオ)を集中的に検討する。(教員および学生) ・紙芝居の絵について卒業生(中島)から指導を受ける。 ・RSKの取材を受ける。 ・山陽新聞の取材を受ける。 ・RSKの取材を受ける。 ・紙芝居の絵が出来上がる。 ・絵の裏打ち(厚紙貼り合わせ)作業を行なう。 ・山陽新聞の取材を受ける。 ・山陽新聞に記事として掲載される。 ・RSK番組「山陽イブニングニュース」で放映される。 ・最終仕上げを行なう。(完成!) ・ノースヴィレッジにて紙芝居の初公開を行なう。 ・NHK、RSK等によって放映される。</p>	山陽新聞(5/7)、毎日新聞(5/7)等に記事として掲載される。
<p>※この記録は紙芝居「させきの子牛」の制作が完了するまでの活動や事項等の内、節目となる事柄を抜き書きしたものである。 ※紙芝居のストーリー(シナリオ)を書き改める作業は、ほぼ10回に及んだ。 ※紙芝居の絵の制作は、卒業生の指導を受けながら、上記学生全員が分担して取り組んだ。</p>		

表2 紙芝居「きせきの子牛」の制作と上演活動に関する記録 —美作女子大学「元気くんの会」の活動を中心に—

日 時	活 動 の 内 容 ・ 事 項 等	備 考
平成10年		
10月17~18日	台風10号が岡山県を縦断	この間の経緯については「第1報」(本紀要に掲載)に詳述されている。
10月21日	子牛の牧場帰還	
11月18日	子牛がおかやまファーマーズ・マーケット・ノースヴィレッジへ寄贈される	
12月中旬	・ノースヴィレッジより、美作女子大学へ紙芝居制作依頼	
平成11年		
1月24日	・紙芝居制作のための第1回取材旅行(石岡牧場・ノースヴィレッジ)	被災1周年。
3月6日	・紙芝居制作のための第2回取材旅行(吉井川~瀬戸内海の黄島)	
3月10日	・きせきの子牛の愛称「元気くん」に決定(森本直哉くん5歳の案採用)	
3月14日	・きせきの子牛命名式	
4月13日	・中林淳真氏による「子牛の元気君」の曲発表	
5月1日	・紙芝居「きせきの子牛」完成	
5月5日	・ノースヴィレッジにて紙芝居初披露	
5月28日	・ノースヴィレッジにて播磨高原東中学校1年生と交流(紙芝居の上演)	
6月5日	・久米町立中正小学校にて紙芝居3回上演	
10月18日	・「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」発足: 発足会にて紙芝居披露	
10月25日	・鶴山塾「とまり木の会の夕べ」にて紙芝居上演	美作高校の姉妹校国際交流における行事の一つとして組み入れてもらったものである。
11月14日	・第20回記念神奈川県手づくり紙芝居コンクール本選出場:「最優秀賞」受賞	
11月21日	・ノースヴィレッジにて「きせきの子牛“元気くん”1周年記念祭」: 講演「元気くんの命の旅から学ぶこと」(福田恵子)&紙芝居上演	
11月24日	・紙芝居受賞報告:岡山県副知事山口勝巳氏を訪問 勝英地方振興局・津山地方振興局訪問	
11月29日	・紙芝居受賞報告:津山市長訪問	
12月5日	*紙芝居貸し出し(津山市北園町内会)	
12月12日	*紙芝居貸し出し(津山市北園町内会)	
12月19日	・津山市立図書館にて紙芝居上演	
12月23日	・奈義文化センター内「なきの子じゅく」にて紙芝居上演	
平成12年		
1月27日	・吉備高原小学校にて紙芝居上演	被災2周年。
1月30日	・鏡野町立大野小学校PTA研修会にて講演(福田恵子)&紙芝居上演	
2月15日	・紙芝居英訳版完成(本学非常勤講師ウォレック氏夫妻による英訳)	
2月16日	*紙芝居貸し出し(朗読奉仕の会:社会福祉施設「弥生が丘」にて上演)	
3月10日	*紙芝居貸し出し(津山市立河辺小学校)	
3月21日	*紙芝居貸し出し(津山市弥生なかよし児童クラブ)	
3月21日	・本学教員(松岡信義)による紙芝居オーストラリア上演 (メンジー・クリーク小学校)	
3月22日	・本学教員(松岡信義)による紙芝居オーストラリア上演 (アリスベリー高齢者福祉施設)	
3月24日	・本学教員(松岡信義)による紙芝居オーストラリア上演 (エメラルド・セカンダリー・カレッジ)	
3月25日	*紙芝居貸し出し(津山市立中央児童館)	
4月8日	*紙芝居貸し出し(美作高校教員:社会福祉施設もその学園にて上演)	
4月29日	・ノースヴィレッジにて紙芝居上演	
5月4日	・アルネ天満屋津山店にて紙芝居上演	
5月7日	・おかやまファーマーズ・マーケット・サウスヴィレッジにて紙芝居上演	
5月11日	・NHK国際放送局ラジオジャパンによって一連の活動が全世界に報道される	
5月21日	・「津山市子ども祭り」に元気くんの会が参加:紙芝居上演	
5月22日	・「第1回岡山芸術文化賞特別賞」受賞	
5月31日	・ノースヴィレッジにて播磨高原東中学校校外実習交流会にて紙芝居上演	
7月1日	・障害者施設「みすず荘」にて紙芝居上演	
7月7日	*紙芝居貸し出し(津山市立西小学校)	
8月19日	*紙芝居貸し出し(ふれあいの丘「ゆうあい」)	
9月6日	・西郷町立中条小学校(隠岐島)にて紙芝居上演	
9月7日	・都万村立都万小学校(隠岐島)にて紙芝居上演	
9月15日	・奈義町上町川地区にて講演(福田恵子)&紙芝居上演	
9月29日	・東津山高齢者学級にて講演(福田恵子)&紙芝居上演	
10月14~15日	・白梅祭にてスライド紙芝居上演・絵本原画展・日本アニメーション祭り開催	
10月29日	*紙芝居貸し出し(勝北町図書館子どもフェスティバル)	
11月23日	・ノースヴィレッジにて「きせきの子牛“元気くん”2周年記念祭」: 講演「“元気くん”の絵本ができるまで」(福田恵子)&紙芝居上演	
12月17日	*紙芝居貸し出し(大谷子供会)	
12月22日	*紙芝居貸し出し(鶴山小学校ひよこ児童クラブクリスマス会)	
12月23日	・柵原町立図書館クリスマス会にて紙芝居上演	

※この記録は、紙芝居「きせきの子牛」の制作・上演・貸し出し等の活動およびこれらに関わる事項の概要である。
 ※貸し出しの日付は、貸し出し先で実際に上演された日である。(貸し出し期間は、上演日を含め3日を原則としている。)
 ※上演時の人数は、10数名から300名以上の場合まであり、スクリーンに拡大して映すなどの工夫をしたこともある。
 ※「紙芝居上演」の記述は、美作女子大学「元気くんの会」の学生によってなされたものが殆どであるが、この活動に賛同する学生たちによってなされたものも含まれている。

1. 主旨

新聞等で既報の通り、平成10年10月18日未明、岡山県を直撃した台風10号の集中豪雨により、津山市金屋、石岡牧場の子牛1頭が濁流の吉井川を約90km流され、瀬戸内海の牛窓町・黄島で奇跡的に救助された。

おかやまファーマーズ・マーケット・ノースヴィレッジでは、この子牛を石岡牧場から寄贈を受け、緑豊かな牧場で飼育するとともに広く公開し、来園者とのふれあいや愛称を募集しているところである。

今回、子供たちを励ます教育的見地から、この激流の中を頑張って生き抜いた忍耐力と勇気のある元気な子牛の姿を、紙芝居として制作する。

2. 制作期間

12月から まで

3. 制作内容

(1) 内容

子牛の生い立ちなどを参考として制作者の自由な発想で創作することとし、特に、次の事項に留意する。

- ①対象は小学校低学年程度とする
- ②「奇跡の子牛」の強い生命力があふれていること
- ③子供たちに勇気と感動を与えること
- ④幸福な結末になっていること

(2) 体裁

完成作品として 8～12枚分（字数2,400～3,600字）とする。なお、作品1枚 300字前後として段落構成とするが、次の場面は入れる。

- ①石岡牧場での幼少期
- ②台風の場面
- ③奇跡的に救助された場面
- ④ノースヴィレッジにやってきて幸せに暮らしている場面

4. 制作依頼

(1) 絵とシナリオを一括して依頼する。

(2) 制作依頼先

()

(3) 著作権

作品の著作権はすべて主催者に帰属する。

(4) 紙芝居用の舞台は園内クラフト工房で制作する。

5. 制作経費

制作に要する応分の経費を負担する。

6. 作品の発表

園内でイベントを実施し、発表する。

7. 制作後の利用方法

(1) 園内イベントで紙芝居上演会を実施する。

(2) 作品をビデオにとって園内2カ所（ファーマーズハウス、畜舎）の映像装置で放映する。

(3) 学校、子供会などに貸し出しする。

奇跡の子牛元気君

生還 紙芝居で再現

「奇跡の生還」を紙芝居で再現。く生きよつと成長するストーリー。昨年十月の台風10号水害で、津山市 最も苦労したのが絵柄。最初はアニ内の牧場から吉井川沿いに約九十キロ、メ風だったが、「もっと水害の緊迫流されながら助かった子牛「元気君」感を一との意見が出て下絵を四、五の話に基づき、美作女子大(津山市上河原)のグループが制作していた紙芝居が一日、完成した。五日に元気君のいるおかやまファーマーズマーケット・ノースウィレッジ(勝央町)の絵は、ポスターカラーで着色した。

美作女子大 グループ 5日、Nウィレッジ

岡)で来場者に披露する。

制作したのは、同大の福田恵子助 午前十一時と午後零時半から、津山教授や演劇部の八人ら。同ウィレッジに依頼され二月以降、飼われていた石岡牧場(津山市金屋)や漂着した黄島(牛窓町)など現地取材を重ねた。

五日は、同ウィレッジ特設会場で上演後は同ウィレッジへ贈る。

タイトルは「きせきの子牛」。成 山市上河原は「実際にあった元気君の頑張りや少しでも多くの人に感 牛が、台風水害の漂流を通して、強 じてもらえれば」と話している。



完成した紙芝居「きせきの子牛」を見る福田助教授(左から二人目)と演劇部員(美作女子大)